



(一社)日本ボーイスカウト神奈川連盟 川崎スカウトクラブ

目次

日本人にとっての十二支	1	欧州旅行記	4、5
年男の少年時代	2	エクアドル訪問記	5～7
水とスカウティング	2, 3	活動報告	7, 8
ジャンボリー物語	4	会員紹介、編集後記	8

〔日本人にとっての十二支〕

谷本 通安

新年のお慶びを申し上げます。本年は2024年で令和6年の辰(龍)年です。此の様に三つの年代の数え方がある。一つ目は西暦、二つ目は元号(年号)三つ目は十二支の各々表記です。西暦はカトリック教会が広めた世界共通の表記・暦(こよみ・カレンダー)で(イスラム暦の国々は異なる数え方をする)現在は多くの国で用いており、これは欧米の強国が世界各地に植民地拡大した帝国主義の名残である。尚西暦はローマ教会の司祭で神学者ディオニシウス・エクシグスによって525年に作られた。元号(和暦)は日本独自の「一世一元制」紀年法です。「大化」から「令和」、まで248回の改元あり、)明治維新以前は1人の天皇の代で何度も改元を、中でも96代後醍醐天皇と102代後花園天皇は何れも9回も改元されている。現在でも年賀状(明治半ば頃から広まる。)等で身近なものとして親しまれ暮らしに溶け込んだ十二支(「干支」は十二支と十干を組み合わせた暦法)の起源は、古代中国から、平安時代に後半頃に様々な形で広まり、陰陽五行説から派生した「十二支占術」だけが日本には動物を神使(神の使い)とする動物信仰があり習合した。江戸時代迄旧暦で定めた月日と十二支とを組み合わせた暦に沿って生活していた庶民らに日常的に愛された動物と結びつき11の實在の動物と辰(龍)という架空の生き物からで十二支を受け入れた国々では自分達の好みの動物に置き

換。例えばベトナムでは牛を水牛に未を山羊に卯が猫に、インドでも酉をガルダにモンゴルでも寅を豹に、タイでも未を山羊にアラビアでも辰がワニに(日本以外で亥を豚にしている)になっている。

愛玩動物の猫が日本の十二支にいない訳は昔話にもあるが、実は猫は高価の上、江戸時代になっても中々数が増えず鼠除けとしての猫絵を売る商売があり、猫は奈良時代、中国から鼠が経典をかじるのを守るに持ち込まれた。平安時代末期の絵巻物「信貴山縁起」に描かれているのが日本最古で、愛玩動物として登場は「枕草子」か「源氏物語」等からである。

江戸時代以前、口伝に従って最も良い時間、良い方位で陰陽五行説に基づく風水の法則で仕事に当たるも、その後論理に合わないとな全面的に否定を受けたが、明治初年・実業家・高島嘉右衛門(開国後神奈川海岸埋め立て、鉄道敷設、ガス会社等の事業経営、現在も地名が横浜に残っている)は独学で易の研究を進め、陰陽五行説(陰陽道)の占術化の流れを作った人物で「高島易断」の祖である。理論は合理的で分かり易いと高い評価を受け十二支の考えが急速に知られ流行した。それなりの運勢判断が出来る十二支占術はより身近なものになっていった。

十二支に因んだ品物や動物を象った玩具が縁起物として幸運が訪れると持て囃されて生活の中に年中行事や風俗が溶け込み神社、寺院への信仰と結びついて愛着を持ち続けられている。最後になりましたが、皆様に良い年でありますように祈念いたします。

## [年男の少年時代]

今村 文彦

七度目の年男はどのような環境で育ったか、私の少年時代の遊びを思い出してみました。

私の父は終戦まで台湾で教職にあり、私は5歳まで台湾の地で育ちました。本土に引き揚げてきて後、少年期を鹿児島県の寒村・僻地で過ごしました。

そこは、青く澄んだ山、豊かに流れる母なる川、春は菜の花レンゲの咲き乱れる田園、わが故郷の風景は懐かしくちょっと甘酸っぱい。

敗戦の混乱の残る昭和21年、私は川内原発が鎮座する地から数キロの近くにある、さつま川内の久見崎という村、滄浪（そうろう）小学校1年生でした。機銃掃射で生徒が犠牲になり悲しみの癒えない小学校、木造の校舎のない藁ぶきの校舎、床もない砂地の教室で入学式を迎え「今村文彦君」と呼ばれドキドキ、砂地に足を取られながら校長先生の前に出たほろ苦い思い出は今も鮮明に記憶の中にあります。この時期日本列島はひどい食糧不足、思うに子供5人を食べさせてゆく両親の苦労は並大抵のものではなかったろうと思います。母が時折「お芋の取れる時期までの3ヶ月が一番苦しかった」と言っていたのを思い出します。

滄浪小への道のり、何キロあったのでしょうか、風雨の日など登校は教師の父の後ろを一行で部落の数人と一緒に、楽しくもつらい思い出はありません。

登校の途中、少年の目には、川内川の清き流れ、波打ち際の軽石、青ノリ、道の反対側に流れ込む川のせせらぎ、赤いカニが群れる景色が少年の興味を満たしていました。

その後、父の転勤で宮之城町柗野という地へ、小4年まで、バスも通らない僻地、街へ出るには3里と言われていましたので少年にとっては楽ではありませんでした。日が落ちると真っ暗闇の世界、星のきらめく別天地、明かりなしには夜の歩きはできません、ぼおっと道路の薄明りを頼りに歩ける程度、こんなことがありました。父が校長会で早朝出かけましたが、溝に落ち戻ってき松明を明かりに再度出かけたこと、懐中電灯もない貧乏な時代でしたから。

親の苦労など知らずに、少年は楽しい思い出ばかり輝く夜空を眺め家族団らんの時を懐かしく思い出します。

何といても少年には真夏の川遊び、潜って魚を追いかけたり、水中の洞穴探検、杉でっぼう、ヒョドリノ罫、メジロとり、独楽づくり、メンコ遊び、本当に自然児の日々をおくりました。

子供は遊びが仕事、私にとってこのような僻地で野山を駆け巡り思う存分遊べたことは、今の自分の身体作りの基礎、精神面の根幹づくりに役立っているのだろーと思っっています。

経済白書で「もはや戦後ではない」と書かれた前のことですから日本は貧しかった、巷では笠置シズユの“東京ブギウギ”、近江敏郎の“山小屋の灯”貧しかったがよい時代でした。



## 『そして年男が、今思うこと』

年を重ねてきたせいか、昨近、人との繋がり「ご縁」ということに考えが及ぶことが多くなりました。過去、どんなに多くの人が私の周辺に立ち止まり、あるいは近くを通り過ぎ去っていったことか。

昨近、何かと不安をあおるニュースの多い中、これからの希望を生み出すためにも、地域社会とのつながりを深め周囲の方たちとのいい関係を築きつつ暮らしていきたいと考えています。

## [水とスカウティング]

稲葉 正明

スカウトは質素である。簡単に手に入るものも大切に使う。2023年12月にCOP28が開催されたUAEドバイは砂漠に囲まれているにも関わらず水を大切に使うてはいない。大規模な淡水化設備から水が

豊富に供給され、飲料用ミネラルウォーターも輸入され、安価で販売されている。原油で潤っている中東の産油国では、「湯水のように」ではなく、「油水のように」消費することが無駄遣いになるのだろう。

私たちの家では蛇口をひねれば水が出てくるが、大切に使っている。だが、毎日使う水の量まで考えたりすることはない。キャンプに行くと、飯盒で4合のご飯を炊くために、米をといで、水を目盛りまで加え、炊き上げる。食後は水で洗う。これらの段取りに水は欠かせない。相当な量の水を使うことになるが、炊事場まで水を運んでこなければならぬ



キャンプもある。水はとても重い。スカウトは水によって料理の手順や生活の知恵を学ぶことがで

きる。就寝前に米をといでおくこともある。

高地のキャンプならば気圧が下がるので沸騰温度がわずかに変わり、水の量も調整が必要になることを覚える。お手軽な“チンご飯”とは訳が違う。

水の量と火加減でご飯の炊きあがりが変わってしまうことを実験、観察しているようなものだ。

水がお湯になり、沸騰すると、ぼこぼこと飯盒の中で音が立ってくる。吹きこぼれた米飯の香りがおかずの盛り付けを促す。炊飯係のスカウトは燃え盛っている薪を火床から外すタイミングを見計らう。

おいしいご飯が炊けた時は嬉しいし、感謝の気持ちがわいてくる。焦げ飯でも、芯ご飯でも、わいわいと口に入れる。炊事場まで重たい水を運んできたことは忘れる。キャンプは楽しい、そして水はその楽しさを支えてくれている。水は訓練プログラムにもなくてはならない。水練という言葉もある。“水に山にきたえん、”という歌詞が〔年長隊富士野営の歌〕の1番に出てくる。昭和44年に開催された年長隊富士野営の3日目、筏を作るために丸太とドラム缶を分担して山中湖まで運んだ。重かった。結索が終えると湖上に浮かんだ筏が進みだす。水の

浮力が筏の重さを打ち消している。

スカウトソングには、水をよく観察し、崇めるような思いもこめられている。

◆ [ハイキングの歌] 作詞：中野忠八

“河の水ぬるみたり、野辺の花 咲きいでん、”

◆ [山の凱歌] 作詞：堀内敬三

“真昼のひざし 岩根をさきて燃ゆれど はぎまの水に靈気はほとぼしる、”

◆ [山鳩] 作詞：中村 知

“友とふたり 谷間にくれば 清水はむせび 夕風かほる、”

◆ [若いつどい] 作詞：古田誠一郎

“ハイオ いまぞ われら ホイ水に練り 山に鍛う、”

◆ [十種野営料理の歌] 作詞：中村 知

1 番 “水を飯盒に八分 削り鰹節いれて、おみおつけ “

2 番 “水をお鍋八分 骨付きの肉入れて、シチュー”

10 番 “この昼飯で最後一切合切平げん 皆 何でもかんでもきざみ(ヨウ)水をさして焚けば ごっちゃ ごっちゃ ごちやっちゃっちゃっ ぐらぐらぐつららら 塩味付けて くず(葛) かけりゃ アッ 八宝菜”

〔十種野営料理の歌〕の1番、2番では水を八分入れ、10番では水はさして焚くのだ！とガッテンする。

フードロスのないように工夫されたトレンドイメニューだったことも知る。スカウトが質素になるヒントが10番にある。

Chat G P Tに“なぜ、水はキャンプで大切なのか？”と質問すると、“キャンプでは水は非常に重要です。キャンプ場で水を確保するには浄水器がおすすめです。ちゃんと管理されていない場所では水は検査されていないか、何かしら問題があると言えます。飲むには適さないので浄水器で浄水してから煮沸することが最適です。キャンプで安全な水を確保し、楽しいキャンプを過ごしましょう。”と即座に答えてくれるが、キャンプが楽しく過ごせるような気持にはならない。五感を使って水の大切さを知るスカウティングの方がいろいろな情報を集める AI の答えよりはるかに楽しい。



## [ジャンボリー物語]

### [第11回日本ジャンボリーの思い出]

寄稿 水野 英明

第11回日本ジャンボリー（11NJ）は大分県久住高原で開催されました。平成6年（1994年）8月、今から30年も前の事です。当時S特委員長だった私は、先輩の安藤徹さん（第1隊）田島宣彦さん（第2隊）と共に地区派遣隊の隊長（第3隊）として奉仕しました。今回手元に残る史料を読み返し記憶を補いながら11NJについて記してみます。



大会テーマは「蒼き草原より未来へ」。会場は久住山のすそ野に広がる牛の放牧地、まさに“蒼き草原”でした。副題として「地球にやさしいジ

ャンボリーをめざそう」が掲げられ、穴を掘らない（側溝もNG）、プロパンガスで炊事をする初めての大会でした。SDGsの時代を見越した“未来への”第一歩だったのかも知れません。

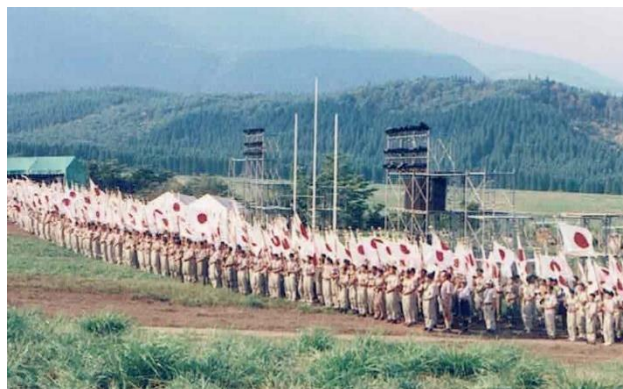
会場までの道のりは遠かった・・・川崎から久住まで片道23時間のバス旅の果て、いよいよ会場入り。何もない大草原に「テーマにふさわしい場所だと思った」とスカウトが感想をもらす中で神奈川第3隊のサイトが完成、活動がスタートしました。

スカウト達は毎日元気にサイトを出発し、色々なプログラムに挑戦してきました。隊長として「全員パイオニア賞をとる！」を目標に掲げ、結果として全員がパイオニア賞を首にかけ最終日の朝礼に臨むことができた事はとても良い思い出となっています。

入場時青々としていた草原も3万人の人間が数日間歩き回ると、草は踏み固められ道となり、町が出来上がりました。自然に対する人間のインパクトの強さを改めて実感しました。

この大会で特筆すべきことは、期間中一度も雨が降らなかった点です。高原とはいえ快晴の空の下、スカウトの顔が日に日に黒くなってきたのは日焼けのせいだけではなかったはず。大会歌の中に♪遠く

まで来たね～夏は美しい♪という歌詞があり、はじめのうちは♪来たね～♪と歌っていたのに、そのうち♪遠くまでキッタネ～♪とスカウト達が楽しそうに歌っていたのを鮮明に覚えています。



あれから30年、スカウト達も40代半ばとなり、それぞれの人生を歩んでいる事でしょう。

今でも当時の仲間と交流があるという話を聞くと、あの夏の10日間は参加者それぞれの人生に何らかの影響を与え、思い出として残るものになっていくれば良いなと思います。そして今まさにスカウティングに励んでいるスカウト・スカウターの皆さんにも色々な大会に参加し記憶に残る経験をしてもらいたいと願って止みません。 弥栄

## [欧州旅行記] (パリ編)

小川 芳郎

コンコルド広場から「ツールドフランス」の到着会場になる三色旗はためくシャンゼリゼ通りを凱旋門に向けて登っていった。ドゴール広場を360度回転して、シャンゼリゼ通りを下り、サン・アントニオ通りにあるホテル“ホームプラザ別館”に到着。

午後9時30分、歩いて20分程の老舗カフェ『ラ・パレット』へ行く。小粋なギャルソンがオーダーを取りにくる。軽めの夕食を楽しむ。

店を出て、ドビッシーと名のついた館に泊まる。パリでの第一夜、突然、非常ベルの音に目を覚まされた。強盗のたぐいが非常ベルを鳴らして部屋から出てきたところを逆に押し入るのではないかと思ったりして、廊下側のドアは中々開けられなかった。

暫くして同じホテルの向かい側の建物の窓が開いて、当館の人と外人同士声高に話し合っている様子

から火事の気配を感じた。そのうち煙が屋根越しに立ち上ったので中庭へ降りた。そこからフロントを抜けて、表通りへ避難しようとしたら、なんとフロントから赤い火の手が上がり、表通りへ出る口はふさがれてしまった。ホテルの裏出口を知っていたので、ある程度の心の平静さはあったものの、通路を知らない宿泊客の中には逃げ口をふさがれたと思って右往左往していた。裏出口から 200mの距離を表通りに廻った。消防車のハシゴが 5 階辺りに延びていた。野次馬が 50 人位いて、酒臭い浮浪者風の男が近寄ってきたので、潮時と思いホテルの部屋へ引き返した。3 階の裏道に面した部屋から、道路上の消防士と警官が握手したのが見えたので鎮火したことを確認できた。私は「パリは燃えているか」を思い出した。今なら「ハイ！パリは燃えています」と答えられたのだ。まことに我々観光客をとらえてはなさない魅力あるパリ、このパリが戦火から守られたことはフランス人ならずとも幸いだっただ。

こうして思いもかけぬ旅行の味つけがあった結果、時刻は夜明けの 6 時になっていた。9 時にはエッフェル塔に上り展望台からパリを眺めた。



## [40年目のエクアドル訪問記]

＝わが青春の ECUADOR へ＝

長谷川 博之

南米のエクアドル (ECUADOR) と言われても日本人には余りなじみがない国。バナナとガラパゴス諸島

のある国と言われれば、なんとなく・・・わかる様な気がする国。そんなエクアドル共和国に 2023 年 8 月 8 日～8 月 25 日にかけて行って来た。

なんでそのような国と言われるかもしれないが、そこは入社して最初の海外出張先、そして素敵な人々と知り合った街だからである。

1981 年 1 月 18 日、おりしも川崎地区創立 30 周年記念祭の開催日に、私は成田空港から南米エクアドルに旅立った。人生で初めての海外出張で、アンデス山脈にある CUENCA という第三の首都でディーゼル発電所を建設するのが目的だった。

今回はその地でお世話になった Escobar 家の皆さんとの再会、そして建設した発電所を再訪するのが最大の目的だ。それにしてもスペイン語はもう忘れてしまったし、かの地は英語が通じない、どうする長谷川・・・高級なポケットークを購入した。これには本当にお世話になった！

飛行機はヒューストン乗り継ぎで首都 QUITO (標高 2800m) へ。約 400km の遠距離にも関わらず半ば強引に Escobar 家の長女 Fabiola に迎えに来てもらった。40 年振りの訪問とあって不安いっぱい、口内炎も大きいのが出来てしまった。

再会まであと何時間という感じで東京からチャットで連絡しながら、いよいよエクアドル入国。実に日本から 26 時間、時差 14 時間のエクアドル到着。

顔を見たときに涙腺が緩む、考えていた言葉が出ない・・・何と。絞り出したのが “Hola como estas, ha pasado mucho tiempo y llevamos 40 anos esperando.” 「あんた元気か？しばらくぶりだ 40 年もかかってしまった！！」当時の高校生は二人の子供と二人の孫を持つ立派な数学者になっていた。

さて、ここ QUITO では昔の記憶から、まずは赤道



記念碑を訪れた。40 年前は建設中だった記念碑、実は GPS が普及した今日では 260m ずれていたことが分かり、隣に記念館を作りその中に真の赤道が展示さ



れている。しかし測量した 18 世紀の技術でこの誤差はとてつもなくすごい偉業だと思う。

東京まで 15,000km と書いてあった。

ああ、口内炎が痛い！翌日は Otavalo という先住民族の街へ。1981 年のカーニバルの日に訪れた街だが、民族衣装を着た人が少なくなったという印象で、これは時代の流れの結果だそうだ。まず口内炎の薬を購入。そして有名なアンデスの民芸品を売る土曜マーケットへ行く。そこでの買い物はとても楽しい。もう二度と訪れることが出来ないと自分に言い聞かせていたので、この際だからと奮発して 3 泊 4 日で 1,400km 離れたガラパゴスまで足を延ばす。

ガラパゴス空港に降り立つと直射日光がものすごく暑い！ここは海岸地帯なので高山病の心配はない。大きなサボテン、アザラシ、イグアナ、ゾウガメ、



鳥、植物、すべての生物が保護されており、入島時に自然保護の誓約書を提出。

徹底的な自然保護規則に則ったプロツアーガイドにより観光するが何を言っているのか分からないのが難点。

早速、栈橋でアザラシが寝ていた。浜辺にはペリカン



やイグアナが普通にいます。自然を満喫したところで 1300km 離れた首都 Quito に移動。そして

明日はいよいよ懐かしの街、Cuenca 訪問だ。

さて、ガラパゴスから一路 Quito へ戻り、さらに Cuenca まで約 1 時間で空港へ降り立つ。Fabiola の娘の Monse が迎えに来てくれた。ここは既に標高 2800m、かつて高山病になったことがあるので高山病予防薬の世話になる。そしてクエンカ散策！



Calderon 公園にスペイン侵略時代の教会である Catedral 昔の Hotel Conquistador の前で写真撮影、もう既に涙腺は緩み感無

量である。今では素敵なトラムが路面を走っている。

街には大きなショッピングモールもある。しかし街を外れば昔とさほど変わらない。それにしても日本では見ない急坂がやたらと有るので車はマニュアル車だけだ。翌日は Escobar 家のお母さんのお墓参りやかつて Escobar 家があった所を訪問した。

8 月 18 日、最大の目的の一つである EL Descanso 発電所への公式訪問が出来た。これは Escobar 家の次女 Sra. Rocio さんが電力会社本社に「当時担当し



た日本人技術者が来るので訪問を許可して欲しい」と依頼をして正式に許可されたもの。

持参した建設当時の写真と比べながら往時を感慨深く思い浮かべる事が出来た。特にエクアドル史に残る大洪水で二度も水没するも、日本を始めとする世界各国の支援によって復旧されたとの事だった。こういう体験は技術者冥利に尽きる！“オーツ、これは僕が設計した設備だ！”とか写真を見せながら説明して回る。ここで奇跡が、案内してくれた技師が写真に写っていた人物を指し彼の友達だと言う。彼は消息を探していた当時の技術者の知人である事が分かり、その場で連絡を取ってもらい後日、奇跡的な再開が出来た。



また、この日の夜、Escobar 家の皆さんが再会を祝うホームパーティーを開いてくれ、40 年振りの再会はちょっと不安だったけど、皆親切に迎えてくれたのがとても嬉しかった。Escobar 家のお父さんも

93 歳だが元気だし、実に素晴らしい家族だ。



今回の旅ではこの家にホームステイさせていただいたのも事も感謝だ。いつの間にか口内炎は

収まっていた。

8月21日、この日は先に紹介した音信不通だった旧知の技術者 Sr. Jorge Lopes 氏と再会出来た。

40年前には研修で来日し、我家にも来てもらった友人だ。彼は3年前に電力会社を退職し現在は農業をしているとの事だった。



お互いに連絡先を交換してメールによる連絡が出来るようになった。素晴らしい再開に涙腺は緩みっぱなしだ。さて、感動の Cuenca 滞在も中盤、標高 3160m のインカの遺跡 INGAPIRCA や広大な標高 3960m CAJAS 国立公園に行った。氷河期に出来た山々、大きな湖、自然豊かだ。しかし高山病は容赦なく襲ってきた。散策もままならず情けないが退散。

8月23日、いよいよ帰る日がやってきた。朝から子供や孫が挨拶に来る。Fabiola と息子の Dario と孫の Lucas が空港まで送ってくれた。再会を誓い機上の人となる。帰りは国内線の乗り継ぎもあり、36時間もかかった。今回の旅は17日間のうち10日間アンデス山脈の高地に滞在していたため終始高山病に悩まされた。それを除けば二度と行けないであろうエクアドルでの素晴らしい再会と思い出の発電所訪問、思い出の地訪問は大成功だった。この計画・実行を後押ししてくれた妻・静子には感謝しかない。

この紀行文を読む事が出来ないが Escobar ファミリーにも感謝するものである。彼らが来日した時には、日本を案内出来るように準備したいと思う。

## [行事部活動報告]

### [収穫祭・Chuck Wagon の風に乗って]

佐藤 周一

恒例の収穫祭を10月25日黒川野外活動センターで実施しました。今回のメニューは、百木さん（炊き込みご飯・けんちん汁・長芋ステーキアンチョビのせ・鶏肉ステーキ）渡部さん自家菜園収穫物（茹で落花生、焼き芋）佐藤担当スモーク（味付け卵・シシャモ・ホタテ・沢庵）高安さん（白菜即席漬け）小川さん（むろ鱈くさや）百木さん（デザート長野直送・信濃ゴールド）メインの炊き込みご飯は当初飯盒3個を予定していたのが、センターに電気釜があり予定を変更。料理は出来ましたが電気釜が不調で沸騰せず、急遽鍋に移して炊き直して間に合いました。何時ものようにセンター職員に出前をして、皆で食しながら雑談に花が咲きました。今回は市野さんの紹介で前55団の佐藤さんが参加されました。（後に入会された）後片付け後、恒例の落ち葉掃き奉仕をして解散となりました。



### [秋の鎌倉を歩こう]

百木 幹雄

11月20日～21日、親睦旅行を鎌倉で実施しました。NHKの「鎌倉殿の〇〇人」「ブラタモリ」等TV後の盛況、コロナが5類への引き下げで、外国人観光客が多く、混雑を避けるのと当会で「鎌倉寺社巡り」を実施していたため、コース設定に苦勞をしました。“生しらす丼”の昼食後、御成通、六地藏、由比ガ浜通、長谷、御霊神社、力餅屋（力餅は美味しく60年前に食した時の味そのものでした）坂の



下、宿泊先「あじさい荘」へ。翌日は、成就院、極楽寺切通しを抜けて西の要衝「極楽寺・宝物殿」、年に数回の、寺宝（重文）の展示に遭遇でき、予想外の喜びでした。江ノ電で「江の島駅」へ。伝説の国際マラソン折り返し点を通り、「龍口寺」荘厳な中に歴史を感じさせる重厚感のある建築は、ガイドがいて欲しいと感じました。「江ノ電もなか」の扇屋で江ノ電旧車輛を見物後、江の島駅通りを散策して目の前の江の島を見ながら解散となりました。



### 〔大磯に住んだ宰相たちを巡る〕ハイク

小川 芳郎

12月5日参加者8名、大磯駅9時40分、大磯駅解散午後3時。歩行距離6.5Km。曇天の中、大磯駅に降り立つと寒さが身に染みた。駅前にある「大磯迎賓館」に行く。庭園文化の薫る大磯町に大正元年貿易商の別荘として建築された洋館である。次にやはり駅前にある「エリザベスサンダースホーム」の前を通り、旧島崎藤村邸に到着。説明員の方は、息子さんを地元大磯のボーイスカウトに入団させて有意義だったと話をして下さった。藤村は昭和16年に大磯が気に入り邸宅を買い取り、執筆中に倒れるまでの2年半を過ごした。伊藤博文が作った統監道を抜けて東海道に出た。大磯中学校の前の巨大な高さの一本松は見事だった。明治記念大磯庭園の宰相達の建物は工事中であり、庭園を見て回った。

空には、ハロに近い太陽があった。城山公園前に来たところで、雪の積もった富士山が見えた。旧吉田茂邸に入る。焼失再建から6年目なので、真新しい状態である。一階の大きなソファが印象的だ。

展示室で8分間のビデオ「吉田茂」を見て学習した。二階の居間に行く。南縁の紅葉が鮮やかであり、北西縁からは茂が好んだ富士山がよく見えた。書斎の本棚には、吉田文庫のラベルが貼られた本があった。昭和23年10月から昭和29年12月（第1次～第5次吉田内閣の6年間政権に就いていた間に必要とした本もあっただろう。茂死去の後、外務省外交史料館に寄贈された以外のあらゆる分野の蔵書が並べられている。その中に「音なき交響曲・青少年のために 三島通陽著」があつた。アンノウンスカウトから書き始めた本である。館外の紅葉の前で集合写真を撮り、大磯駅へ戻った。



### 〔新入会員・再加入会員紹介〕



- ・前 55 団、佐藤道夫さんが 11 月 1 日付けで入会されました。既に活動に参加されています。
- ・休会されていた、長谷川博之さんが再加入されました。今回

エクアドル訪問記を寄稿して頂きました。

### 編集後記

- ・秋の活動期に行事部の活動報告が多くなりました。
- ・11NJ 寄稿文は派遣隊長の心配りが良く分かる文です。久々の新会員紹介も出来ました。感謝です。
- ・次号は5月発行予定です。皆様のご寄稿をよろしくお願いします。 (渡部)